

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑳

「本」のみなさんが語ること

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

前号には「リビングライブラリ」を通して伝えたいことを書きました。今号には、ひとりひとりの「本」のみなさんに伝えてほしいと思っていること、そして伝えてくださっていることを書くことにします。ただ、これまで来てくださったすべての「本」について書くわけにいかないのです、3冊だけ紹介することにします。

ある人にどのようなライフストーリーを語ってもらうかは、同時に、その人の属性のどこに焦点を当てて依頼するかということでもあります。「本」のみなさんは、ひとりの中にさまざまな「当事者性」を持っておられます。例えば、虐待サバイバーのもぎさんは、同時にトランスジェンダーでもあります。わたしは友人のもぎさんに「今回はトランスジェンダーとしてではなく、虐待サバイバーとして話をしてほしい」と頼みました。もぎさんは快く引き受けてくれました。しかし、はじめてのリビングライブラリの日、もぎさんは5分話をしたところで固まってしまわれました。それでも「来年も来てほしい」ともぎさんに頼みました。なぜなら、きっとわたしの勤務校にもいるであろう虐待を受けている生徒に、もぎさんの言葉を通して自分が虐待を受けていることに気づいてほしかったからです。それから2年後、もぎさんの話を聞いたある生徒は、次のような感想文を書きました。

少し自分と重なる部分があって、自分の親は虐待を知らずのうちにしているのかなと思った。弟との差別も虐待になるのかなと思った。そうじゃなかったらいいな…。でも、もぎさんの話を聞いて、少し心の逃げ場所をつくれそうでよかった。

もぎさんは話の中で「シチューのコマーシャルが見られなかった」と語ってくれました。そんな日常の中にあつた小さな傷が、きっとこの生徒に伝わったんだろうと思います。

「あなたはナニジンですか?」。答えるのがとても簡単に思えるこの質問の前で、もだえる人がいます。アメリカン^(注1)のとーますさんもそんな人です。差別や人権はともすれば「不便さ」に着目して、その解決

をもって解消したと捉えられがちではないかと思えます。日本語をしゃべり、日本の習慣を持ち、日本国籍を持っているハーフやクォーター^(注2)の人には、あたかもなんの不便もないように思われがちです。それどころか「ハーフがうらやましい」という無邪気な言葉をかけられずらします。しかし、とーますさんは自分とは何者かという問いに囚われながら生きておられます。そんなとーますさんの語りを通して、単純に「日本人/外国人」のふたつにわけてしまいがちな、この日本社会のありように気づいてくれたらと思っています。

人権学習の作文に「自分がなにをすればいいのかわからない」と書く生徒がいます。おそらくそれは、話はわかったけど、その話が自分の生活や行動、生き方とどう結びつくのかということに思いがいたらないからではないかと思えます。どうすればいいか考えていたとき、防災教育の講演を聞く機会がありました。その中に「当事者は3種類いる。ひとつは被災者。もうひとつは災害ボランティア。もうひとつは被災者や災害ボランティアの話を聞いた人」という言葉がありました。その時「これだ」と思いました。イラク帰還兵のスピーキングツアーの通訳であるこぶちさんは、まさにそういう人です。だからこそ、あたかも当事者ではないように捉えられるこぶちさんに話をしてもらっています。こぶちさんの話を聞いた「わたし」もまた、その次の当事者になる。それが「なにをすればいいのかわからない」へのひとつの答えのかなと思えます。

ある生徒から「1週間かけて10冊全部読みたい」と言われたことがあります。そんな人権学習ができるのは、「本」のみなさんとの出会いのおかげだと、あらためて感じます。

リビングライブラリの話をする時、「よくそれだけの人を集められるね」と感心されることがあります。でも、それはそんなに難しいことではありません。次号には、なぜリビングライブラリが可能となったのかを書きたいと思っています。それは教員としてのわたしの原点について書くことにもなるだろうと思っています。

(注1) アメリカ軍属とアジア人との間に生まれた子どもやその子孫。

(注2) とーますさんはアメリカンが「混血児」と呼ばれ差別された歴史を踏まえて、自らのことを「混血」とあらわしています。また、ダブルやミックスルーツなどの表現もあります。